

学生あなたへ

浅野 泰寛 / 北海道大学 大学院工学研究院 准教授



この新学術領域が発足して三年が過ぎようとしています。事業に参画する先生がたのご指導の下、領域活動の主要な部分を関連する博士研究員や大学院生の皆さんが担っておられます。事業終了後には、「たくさん業績があがり順調に研究が進展しました」、という報告が出来るだろうと思います。元々そういう政策の一環としての事業ですし、その成功は良い話です。こんなとき、皆さんの真摯な努力に水を差すような事を申し上げるのは恐縮ですが、私は問うてみたい「学生のアなたは、それでいいですか?」、と。

何年か前に学部一年生のクラス担任なるものを仰せつかって、三十名あまりの学生に対して個人面談をしたことがありました。総合系クラスに属する彼らは、二年進級時に、薬学、理学、工学、農学などの専門分野へ配属希望を出すことになっていて、配属先決定の相談にのる、というのが主な目的でした。「将来なにをしたらいいの、さっぱりわからん!」という猛者はとても少数で、多くの学生が割と純粋な動機でそれぞれの志望を決めていて、私は安心もしたのです。しかし、些細なことかも知れませんが、ある言葉が気になりました。「役に立ちたい」。幼少の頃からネット社会に生きている彼らは、もっと個人主義的かと思っていましたので、面談をはじめた頃は立派な志だと感心しました。もちろん「役に立っている自分が好き」というナルシズムや、「役に立つことで賞賛されたい」という功名心も垣間見えました。でも、たびたび耳にすると、「役に立たない=人間失格」

という恐怖感が、彼らにそう言わしめていないか?と感じたのです。何かを憚って、自分で自分を準備的に規格化してしまっていないか?と。経済格差、高齢社会、ポピュリズム、ツイッターの炎上、空気を読む、などの言葉で語られる、社会の閉塞感や非寛容さがそうさせているのならば、ずいぶんと気の毒な事です。「役に立ちたい」というのは、わかり易い免罪符で、そう語る学生は真っ当です。しかし、規格化された意志、皆が妙にまともな社会って、これ全体主義?とったりもしました。

論文を出版することは、わかりやすい業績です。領域の先生がたにとって論文出版は義務なので、彼らの表情が陰しくなるのは仕方ないかも知れません。さて、学生のアなたは如何でしょう?無責任に研究を楽しんでいますか?もちろん研究という行為は苦しい時期があります、むしろほとんど苦しい。それを差し引いてもなお、研究をやっていて良かったと思えますか?「論文が書けない=失格」だと勝手に、自分を苛んでいませんか?この新学術領域は、緩いとはいえ課題には制約があります。学生のみなさんが、領域の主旨に沿った業績をあげてくれることは、私たちにとって大変ありがたい。でも、領域研究会に欠かさず足を運んでくれる学生のアなたが、科学的興味や自然観、研究の美学を無意識のうちに規格化してしまうことを私は恐れます。領域活動に参加する事が、逆にあなたの新鮮な心と柔軟な発想を阻害することを恐れます。物理はとても幅の広い学問ですし、何を研究しても良いはずで。

私が大学院生の頃、あなたとよく似た立場でした。ある科研費プロジェクトに入れて頂き、その方向の研究課題も頂きました。研究する動機はとも大事なのですが、人によって様々です。私の動機は、恥ずかしながら、はなはだ低次元です。何かわかる（わかったつもりになる）たびに、「生きているぞ」という肉食動物的恍惚を覚える刹那がたまりません。当時を振り返ると、ずいぶんとつまらないことにも鼻息を荒くできました。なので、先生が「こっちだ」とせっかく導いて下さった方向には研究が進まず、「あっち」に脱線することしばしば。私は、自分で研究課題を見つける力もないのに、反抗だけはするどうしようもない学生で、ほとんどプロジェクトの役には立ちませんでした。でも指導して下さいた先生は寛容で、お荷物の私でも学位が取れるよう算段をつけて下さいました。如何せん動機が低俗なので、何を研究して忘我に至るか？が問題です。「簡潔な式で、量子現象を記述すること」と、舞い上がる瞬間、離陸の有り様は決まりました。でも、どうやって？それは内緒です。

この新学術領域研究が吹かせている「こっち」の風は、順風としてそれに乗れば快適かも知れません。でも風は、いつか凧ぐのです。ぼんやりと、で良いのです、学生のうちに自分の目指したい「あっち」を見つけて欲しい。そのとき、どうして自分は研究（仕事）をするのか、どうなら自分は満たされるのか、その動機を見つめて欲しい。こう申し上げるのは、動機と努力の方向が合っ

ていないと、苦しい時を乗り越えられない、つまり、うまくいくまで頑張れないと思うからです。たとえ地球を救えなくても、ノーベル賞を獲れなくても、〇〇大学の先生になれなくても、…、恍惚に至れなくても、研究するという行為が、あなたの人生を豊かにするものであって欲しいと希います。

あなたの指導教員は、たしかA先生でしたね。「あっち」を探すあなたに、A先生はきっと寛容なはずです。ここだけの話ですが、今でこそ肩で風切るA先生も、学生の頃はかなり「やらかし」ています。今日は「規格外のあっち」かも知れませんが、先生の御引退から久くなる頃に、「こっち」になっているかもしれません。たとえそうでなくても、きっとA先生は祝福してくれますよ、確信を持って「あっち」に歩むあなたを。

後記：Newsletter 編集長の柏谷さんから、何か若者へのメッセージをお願いします、と難しいご依頼がありました。これまで重ねた不義理の数知れず、日頃ぼんやりと感じていたことを、貧しい文章として綴ることになりました。飼いやられたい、これは自分への戒めでもあるのです。

